広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	子どものいのち 復活のツボ : イメージ学からの視点 〈20周年記念講演会講演要旨〉
Author(s)	藤岡, 喜愛
Citation	児童の言語生態研究 , 14 : 53 - 55
Issue Date	1990-11-25
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00045161
Right	
Relation	

裏付けになるもの、生態にあたるところ、事実にあたるところが欠如しているために、読んでいる者に知識としての理解はできますけれども、それ以上につき動かして、新たなものをこう捉えていこうという風になりにくいのが大変残念なことでした。「幼児期の言語生活の実態」(野地潤家)は、昭和二十三年から六年間、私の長男がどういうふうに言語を習得したかということについてのあとづけ・対話例をもとにして報告させていただいたものでございます。

三、児童の言語生態学の構想　その二

主宰が一番求められておられましたのがこの点だろうというふうに思うのでございますが、今後に向かって、実際に言語生態学の構想を組むというような場合に、これはまったくの私見ですが、たとえば、言語活動に一つの視座を求めて、ひとりごと系、対話系、話し合い系、会話系というふうにすると、その生態のおさえ方というものが、腹が決まってくるということになろうかと思いますし、また言葉の生活が営まれる場を中心に、家庭における子どもの言葉の活動・生活の営み・学校全体と学級、さらには、グループとその中の親しい友達というふうに、いくつもに類別が可能だと思います。

また、物語(虚構)の中の子ども達が発する言葉、あるいは受けとめ方というのが、象徴的とはいいますが、そこに現実よりももっと真実のものが描き出されているということになりますと、その児童文学に描かれる子ども達の生活と言葉のやりとりを、どう素材系列と表現系列というふうに対応し合うものとして見るのかどうかという問題があり、児童文学・児童文化を言語生態学の視野の中にどう位置づけるのかという問題があるかと思います。

当然、書き言葉の生態・実態というものと話し言葉のそれとの両者の関連となると、生態学の構想は広がるばかりという気がしますけれども、ある時点で子ども達が書いた物を見ると、ある時期での時代・社会の本当の姿の一端というものを写し出しているので、その写し出されてくる面に生態の断面・横顔というものを読みとることは可能だと思います。

分析的に実際に言葉そのものを追いつめる仕事と、言葉の中へ中へと、あるいは言葉そのものを捉える仕事と、その言葉が生きて働いている、それをまるごと捉えていくのを生態の方とし、その生態として捉えられたものを限りなく析出して動かないところまで、文法の面・語彙の面で、あるいは、その書き言葉ですと、表記の面で、それをずっと対象に据えた上で、詳細な、科学的な取り扱いに耐えうるようなものにしていくわけです。

村石先生を中心とする国語研究所がなさったように、数量的(計量的)な操作を加えてゆるぎのない事実として出すようなものに対して、生態学的な接近、取り組みをどうするのか、ということもありますが、(言語生態学が)固有の領域をどう設けるか、さらには、関連領域・隣接領域をどういうふうに見るかという、その生態学的な研究のあり方というものの研究上の見取り図というものは、もうだんだんに描けるのではないかと、そういう気持ちもいたしております。

子どものいのち　復活のツボ

――イメージ学からの視点――

大手前大学教授　藤岡喜愛

お早うございます。藤岡でございます。

上原先生にものすごい題を頂戴しました。私自身は子どもがありませんが、子どもというのは、おもろいものやなと思っております。子どもの物の見方……それはどこからくるのかという疑問は、逆に子どもを持った方よりは鮮明にあります。

今や学問はあまりにも専門的に高度になりまして、我々人間の事に関する事まで、こんなに難しく専門化された時に、私たちはこれで満足やと言えるのかと、そういう感じが募って参りました。私達が欲しいのは、難しい専門用語によるのではなく、それをできるだけすぱっと、なるたけ少ない基礎概念

で、なるたけ短い思考過程で納得できるということであります。私は今も臨床心理でロールシャッハテストを使っておりますけれども、このインクのしみを、どこで、どないに見はったんですかということを教えてもらいまして、それを集めていきますと、だんだんとその人の心の中の現状がある程度推察がつくというようになってまいります。そういう事で、人間の心の中には、実はイメージがいっぱいたまっていて、インクのしみを見るという事がひき金をひいてくれて、心の中にあるイメージが外へ出てくる。それでその人の現状がわかるということです。何で、それで診断がつくのかという理屈を考えておりますと、人間の心の中に、イメージというものがいっぱいたまっていて、オギャアと生まれる前から、あるいは胎児でも、その時期から始まってずっと私達は心の中にイメージというものを蓄え始めている。言葉というものは、沢山あるイメージを……夢の中のイメージを思い出して下さるとわかるのですけれども、互いにワーッと重なっておりまして、あまり切れ、離れがよくないのですが、それを言葉にのせていくと、あたかも自分の見たイメージが、くっきりと区別があるかのような、そういう感じに変わってくる。ここに言葉というものの値打ちがあるんです。西洋哲学は、理性に重点をおいて、ロゴスの世界こそ一番高級で、理性がそのロゴスをあやつると考えていた訳ですが、イメージタンクという、人間の心はまずイメージというものがいっぱいつまっているんだというのです。そして言葉というものは、そのイメージを取り出し、操作するための道具だという具合にして考えてみますと、今までの西洋的な考え方というのは、あまりに、言葉というものを重視しすぎているという感じがはっきりとして参りました。

これは、私がこの児言態の御研究に非常な共感を覚えた、私なりの理由なのです。

で、本当の言葉が生きているのは、それがどんなにけったいに思われようとも、そこに非常に生き生きとしたイメージがある。それにピシャッと寄り添うような単語がポッと出会うと、そこで聞く者が、とたんにその単語だけでも非常に生き生きと、その人の持っているイメージらしいものを自分で復元する。

我々は、言葉を通して、相手の持っているイメージをある程度推察できる。で、ここに我々の互いの共感というものの基礎がある訳です。ですからこういう具合に、イメージというものを基礎概念としてもって参りますと、もっと自由に皆さんが自分の心について考えて下さるようにできるのではないかと考え始めた訳であります。

そこで、日本語だけでやっていても、これはほとんど自動的にそういうことをやってしまっておりますので、実は却って難しいようです。それで、言葉と、それから持っているイメージとがどういう対応がつくかということは、あらゆる文化で、その固有のやり方がありまして、特に最近、私が興味を持ちましたのは、オーストラリアのアボリジニの皆さんであります。私がオーストラリア、アボリジニに興味を持ちました直接のきっかけは、ジェニファー・アイザックスという、アボリジニの芸術活動を研究している人の、アボリジニの人達の伝説を克明に集めた、『四万年のアボリジニの歴史』という本に大変な感動を覚えたことです。この『四万年のアボリジニの歴史』は、ほんとうに地質学的にも、四万年の歴史なのです。アボリジニが現在暮らしている、特定の山の形、特定の川の流れ方そういうものまで、伝説という形できちっと説明されているわけです。そういうことも含めて、つまり天地創造から、何で空に星があるのかというとこまで含めて、全部それを伝説の形で説明をいたします。実は伝説という言葉をずっと使って参りましたが、オーストラリアでは白人も含めて、これらの事をオーストラリア・アボリジニのドリーミングという言い方が定着しております。ですから〝夢〟なのです。私達が日常みている夢なのではなくて、ほんまに生き生きと現実の歴史を辿り、物事の起こり、起源を説明するものとして、〝夢〟と呼ばれております。現に、あの山がああいう格好になっておるのは、ご先祖が歩き回って、デンと石ころを一つ置いたんやというのがドリーミングなのです。そこで一番活躍するのは、虹の蛇でありまして雨がやんだ後、見事な虹がバァーッと出てくる。あれが虹の蛇やと、あれが天地を創ったんやと、今でもアボリジニの人達は、当たり前に言うとるのです。

ですから、子どもが大人に向かって、ごく当たり前におもろい事言うとるというのと、実は気分が似ている。アボリジニの皆さんは、狩猟採集民でありまして、アフリカにもワティンディガと呼ばれる狩猟採集民がおりますが、人類の中でこれくらい罪のない感じの人はおらんと、まあ神さんに近いみたいなもんやとほめている人がいます。ほんとうに屈託がなくて、慣れるまではちょっと暇がかかりますけれども、いっぺん慣れてしまって、本当に心を開いてくれると、子どもとつき合うてるような安心感がこっちにできてくる。厳しい生活上のルールを守り、厳しい態度で暮らしていながら、私達のような外部の人間とつき合っている間に、ふっと実に柔和で柔

らかい面というものを出してくれる。ほんまに子どもがいてるみたいに思えます。

結局この人達の世界観というのは、先祖が我々のために、こういうよき国土を用意してくれた。食べる物はいっぱいある、その中で人間がのうのうと暮らしている。アボリジニの人達にとっては、回りにいてる生き物は、全部人間でいう親戚関係ではないにしても、非常に密接なつながりがある。で、精神的な感応をさえしている。そして、それは全部先祖が自分達のためにそういう具合に世界を創ってくれたんだと、そういうドリーム、世界観を子々孫々に伝えるために、今度は岩壁画として残すようになりました。一番古いもので、少なくとも二千年は溯るというようなものが沢山ありました。今日は、それを少し見ていただこうと思う訳です。オーストラリアには、地質変動の過程ででき上がったという本当に絵を描くためにできたみたいな岩壁が沢山北の方にあります。そこへ粘土を顔料にして、魚の絵がある。亀の絵がある。蛇の絵がある。もちろん人間もいてると。ずうっとその岩壁に描いてあります。ロックアートのギャラリーというふうな言い方で呼ばれていますが、実際行ってみたら、最初見た時はやはり圧倒されます。オーストラリアの人達はそういう具合にして、自分のドリーミングというものを、今度は岩壁に表現する様になりました。

特にその中で目を引きますのが、ミミと呼ばれる精霊なのです。実はその部族によりまして、精霊の名前はみな違いますので、今日お目にかける場所では、その精霊をミミと呼んでいます。まあ棒状の人間を描いてあるという、それがほんまに子どもの絵そのもので、肩がないのです。棒の胴体から直接ニュッと腕が出ている。これも日本の三、四歳あたりの子どもが肩のない人物画を描くというのに相当します。

そこで、このミミという精霊が出てくることの意味というものが、大変我々にとっては教訓的なものでありまして、アボリジニの先祖が時には人間の格好をして、時には虹の蛇となり、いろんな格好を変幻自在にとりながらオーストラリアを創った。そうして創られたものはお互いにあらかじめ決められた通りに生き生きとお互いの関係を保ちながら暮らさなくてはならないんだけれども、今そういう物の関係を生き生きと保たせている役割をしているのが、実は精霊なんだという訳で、岩壁画の中にいっぱい精霊がある。しかもおもしろいことに、あの岩壁画も実際はミミが自分で描いたんだという訳です。私達の普通の感覚でいうと、当然あれは人間が描いたんですけれども、あの人達は、「これはミミが描いたんや。だからミミは現にここにいるんだ。」という訳です。神話が、神話ではなくほんまの話として、そのイメージが自分の実感というものとぴしゃりと同じで、今の我々のように乖離していない。そこに何か、アボリジニの人がそうであるのと似たような形で、我々の子どもが、何であんなにおもろい物の見方をし、それを何であんなにおもろい言葉で表現するんだろうと。そこにそもそもイメージが湧いてくる原点みたいなものがひとつの実感としてそこにあるという感じがだんだんして参りました。

ともかくそういうので、私が今日、子どものツボなんちゅうことに当たるかどうかわかりませんけれども、アボリジニ達が持っている、そのドリーミングという概念が本当に一つの非常に大事なサジェスションを我々にくれている。この世界というのは、全部一体で一本の草も一本の木も一匹のカンガルーも、一人の人間も、全部、何かの意味でその結びつきを持っていて、一部分だけが勝手に生きられるという世界ではないんだと、それは空の星まで含めて、森羅万象全部、一体となる様な関係を持ち続けている。そういう世界として、ご先祖が我々および、この回りのものをくれたんだと。今でも現にミミが生き生きとそれを支えてくれているんだという考え方です。四万年前からのドリーミングを、今でも当たり前で、今の話だと思って語り伝えている。そこに、イメージの源泉のようなものが感じられます。つまり我々人間は、こういう調子でイメージを持つということ自体が、生きていることに他ならない。それが時あってか、言葉を伴い始める。そこにイメージと言葉との一番始源的な関係が発生するというふうに私は考えます。ですからアボリジニの人達とつき合っていると、言葉としてはうまく通わないけれども、気持ちとしては通うようなものを我々日本人は持っている。そこのところで、何かまだ白人が気のつかんようなアボリジニの理解の仕方というものが、我々にとって可能なのではなかろうか。

ドリーミングをロックアートという形にした時に、何でこないなるのやということを、それを問い続けること自体、大変意味があると思う訳です。子ども達が、幼稚園児から始まってしばらくの時期に、これに非常によく似た形のとり方をするのを我々は見ている訳ですから、どこか非常に深いところで、イメージ的には関連があるに違いない。それは何かという事が、今後も課題であり続けるということになります。どうも、御清聴ありがとうございました。